

「**ありがたき幸せ**」 ルカ17：11～19

I 導入部

おはようございます。11月の第四日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと共に礼拝をささげることができますことを感謝致します。今日は、収穫感謝の礼拝として、第二礼拝では、幼稚科、小学科のお友だちとの合同の礼拝です。

金曜日に、田園都市牧師会の主催で、防災ネットワークの発足式がありました。私たちの住んでいる横浜は、世界一危険な場所であるということが語られました。近年の地震災害で1995年に阪神淡路大震災、震度7、2011年に東日本大震災、震度7、2016年に熊本地震、震度7、2018年に北海道地震、震度7と阪神淡路大震災から東日本大震災まで16年、東日本大震災から熊本地震まで5年、熊本地震から北海道地震まで2年と感覚が短くなっており、この間隔から言うと2019年に日本のどこかで震度7の地震があってもおかしくないと言えます。そのような状況の中で、田園都市沿線の教会が協力して、防災について考え、学び、備えることを共にやりましょうということで発足式となりました。青葉台教会から遠くに住んでおられる方々は、大地震が起こった時、青葉台教会まで来ることは困難ですから、ご自宅に近い教会との関係を作っておいた方がいいのだと思います。防災ということでは、クリスチャンもそうでない人も、共に手を携えて備えることができますので、良き関りができるチャンスだとも思います。

私たちは、いろいろな形で、助けたり、助けられたしなければ、生きていけない存在です。今日は、ルカによる福音書17章11節から19節を通して、「**ありがたき幸せ**」という題でお話し致します。「**ありがたき幸せ**」とは、「**この上ない喜び、恐悦至極、無上の喜び、天にも昇る気持ち**」というような意味があるようです。

II 本論部

一、憐れみを求める

11節を見ますと、「**イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた。**」とあります。サマリアとガリラヤの間ですから、そこには、ユダヤ人とサマリア人の関係があります。そして、12節の最初には、「**ある村に入ると**」と重い皮膚病を患っている10人が登場するわけです。ユダヤ人9人とサマリア人1人なのか、5人对5人なのかはわかりませんが、奇妙なグループでした。ユダヤ人とサマリア人は、交際しないという関係、敵対視するほどに相いれない関係があり、両者が共に暮らすということは、重い皮膚病を患っているという同じ苦しみを背負っているからだったのでしょうか。この村は、そのように、重い皮膚病に患った人々が隔離されていた村なのかも知れません。重い皮膚

病は伝染する考えられと、一般の人々と共に暮らすことは禁じられていました。ですから、普段は絶対に共に生活することはあり得ないのです。このメンバーも、家族から見捨てられ、友人からも仲間からも距離を置かれた苦しい状況、同じ痛みを共有する仲間として、行動を共にしていたのでしょう。

12節には、彼らが出迎え、遠くの方に立ち止まった、とあります。出迎えるということは近くにいるというのが普通ですが、出迎え、遠くに立ったまま、いうのは、律法には、重い皮膚病を患う者は、「汚れた者」と言われ、隔離されなければなりません。そして、「わたしは汚れた者です。」(レビ記 13:45) と呼ばわらねばなりません。ですから、一般の人には近づけないので、彼らはイエス様から離れて立ち止まったのです。

彼らは、重い皮膚病という病の苦しみだけではなく、汚れた者として隔離されて生きて行かなければならなかったのです。その彼らが、遠くからですが、イエス様に出会ったのです。多くの人々の病を癒す救い主が、自分たちの目に前におられるのです。

彼らは、「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」と声を張り上げて言いました。彼らの心からの願いでした。自分たちのこの悲惨な状況を見て下さい。そして、憐れんでください。リビングバイブルには、「イエス様一っ！どうぞお助けを！」とイエス様に今の悲惨な状況から助けを求めたのです。彼らは、いつもなら、人々がいるならば、「わたしは汚れた者です。」と下を向いて歩いていたでしょう。しかし、イエス様に出会って顔をあげて、イエス様に憐れみを求めたのです。

私たちも、信仰生活の中で苦しい事や悲しい事、どうにもならないことを経験します。下を向いて、あきらめの思いで歩いていることもあるかも知れません。けれども、私たちのそばにはイエス様が共におられるのです。私たちの悲惨な状況や現実を見ておられるのです。ですから、下ばかり、自分の悪い状況や問題ばかりを見ていないで、イエス様を見て、「憐れんでください」と彼らのように、憐れみを、助けを求めようではありませんか。イエス様は、求める者、憐れみを乞うものを退けることはなさらないのです。私たちは、厳しい現実を見るのではなく、自分の悪いどうしようもない状況を見て、嘆いたり、落ち込んだりするのではなく、イエス様を見て、イエス様に憐れみを求めたいのです。

二、イエス様の言葉にかける

14節を共に読みましょう。「イエスは重い皮膚病を患っている人たちを見て、「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」と言われた。彼らは、そこへ行く途中で清くされた。」「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」と声を張り上げて、憐れみを求めた10人に、イエス様は、「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」と言われたのです。当時、病気が治ったのかどうかを判断し、治ったのかどうかを決断するのは祭司の働きでした。ですから、祭司たちの所へ行くように、イエス様は言われました。

14節の最後に、「彼らは、そこへ行く途中で清くされた。」とあります。さらっと書いてありますがすごいことです。「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」とイエス様に言われて、10人は10人全員が、その言葉を信じて祭司の所に行くのです。まだ、癒されたわけではありません。何かの変化や兆候があったわけでもありません。イエス様の

言葉を信じて、ただ信じて、イエス様の言葉に自分の全てをかけたのです。癒して下さる、癒されたと信じて、彼らは行動したのです。これは、すごい信仰だと思いませんか。私なら、「イエス様、今すぐ癒して下さい。癒されたのがわかれば、祭司の所に行きます。」となりますが、彼らは、お言葉だけで、行動したのです。ものすごい信仰だと思います。

イエス様を信じるとは、こういうことなんだと思います。この10人の信仰は素晴らしいものです。

マルチン・ルターは、この男たちの信仰を評価して、次のように言いました。「イエス様の指示に従ったこの10人の心の内は次のようなものである。『主よ、わかりました。あなたがそうおっしゃるのなら、私たちは祭司たちのところに行きます。たとえあなたが今この場で、癒すか癒さないかを明らかにして下さらなくても、あなたが癒す力のある方だと信じる私たちの信仰は変わりません。あなたに寄り頼む私たちの心に変更はありません。仮にあなたが私たちを癒すお気持ちがなくとも、それはあなたが私たちにもっと良いものを与えて下さるからなのだと信じます。私たちはただ喜んでそれを待ち望むことができます。それゆえ、私たちが、あなたを良いお方であると信じる信仰を捨てるなどということはありません。』」こう述べた後、ルターは次のように結びます。「これこそが、真に信仰の中で成長するということである」と。10人の信仰をこのように見ているのです。

彼らは、祭司の所に行く途中に、全員が重い皮膚病から完全に癒されたのです。

しかし、話はここで終わりません。15節を共に読みましょう。「**その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。**」癒された10人のうち、一人が癒されたことを知り、神様を賛美しながら戻って来たのです。他の9人も、癒されたことを知り、神様を賛美したことでしょう。けれども、9人は、祭司の所へ向かったのです。それが、イエス様のお言葉だったからでしょう。イエス様は、イエス様の言葉を信じた10人を癒して下さいました。憐れんで下さった。助けて下さったのです。私たちも、今の現実がどのように厳しくても、イエス様の言葉を、聖書のみ言葉を握りしめて、神様の言葉に期待して、神様の言葉にかけて歩みたいと思うのです。

三、あなたは救われた

16節には、この人がイエス様の足もとにひれ伏して感謝したとあります。そして、この人は、サマリア人であったことを告げます。リビングバイブルには、「**実は、この人はユダヤ人から軽蔑されていたサマリア人でした。**」と説明しています。

17節、18節を共に読みましょう。「**そこで、イエスは言われた。「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。」**」

イエス様は、10人に「**祭司たちのところに行って、体を見せなさい**」と言われたので、他の9人は癒されたことを知り、祭司の元へ向かったでしょう。なのに、「**ほかの九人はどこにいるのか。この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか**」と言われたのでしょうか。9人と1人の違いは、神様を賛美するために戻って来たか、来なかったかということです。詳訳聖書には、賛美するというところに、感謝するという意

味もあります。神様に、イエス様に感謝するために、戻って来たのは、このサマリア人、一人だけであったというのです。いや、他の9人は、感謝はしたのかも知れません。けれども、祭司の所へ行くのをやめて、引き返してまで、イエス様の所に戻って来て感謝を表したのです。祭司の所へ行って、癒された体を見せて、清められた。癒されという太鼓判をいただければ、家族のもとに帰ることができる。友人の所に戻ることができる。それは、心からの願いではあるけれども、それが一番の願いではあったけれども、それ以上に、自分のような者に目と止め、声をかけ、「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」とお言葉を下さり、癒して下さったというこの事実に感謝してもしきれない。もう、絶対に癒されないと考えていた。一生、「わたしは汚れた者です。」と下を向いて、言い続けなければならないみじめな人生を覚悟していた。けれども、イエス様は、サマリア人の私をも憐れんで下さった。助けて下さった。もう一度、お顔を拝見して感謝を申し上げたい。そのことを何よりも優先し、願ったからこそ、引き返してイエス様のもとに来たのです。このサマリア人には、癒され、清められたことの喜びとイエス様に対する感謝が溢れていたのです。イエス様に感謝せずにはおられない。だからこそ、戻って来たのです。

イエス様は、「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」と言われました。イエス様は、10人を癒し、清められましたが、「救われた」と宣言したのは、このサマリア人だけだったのです。10人は、重い皮膚病に患い、苦しみの中を生きていた。しかし、イエス様に全員癒された。問題が解決されましたが、でも、それは、救いとは違います。イエス様は、神を賛美し、イエス様に感謝するために戻って来た、サマリア人に「救われた」と宣言されたのです。信仰とは、感謝することだと言えるのかも知れません。いろいろな苦しみや悲しみがあるけれども、イエス様に祈り、助けを求めて解決が与えられたら、イエス様のもとに来て感謝すること。どこでも感謝はできるけれども、イエス様のもとに来て感謝すること、賛美することが救いであり、信仰であることを聖書が示しているように思うのです。

私たちのために、十字架で命をささげて下さったイエス様に私たちは、こうして礼拝に出席してイエス様を賛美し、感謝を現していくことが大切な事だと思うのです。

Ⅲ 結論部

ルカによる福音書5章12節から16節には、イエス様が重い皮膚病の人に直接手を触れて、即座に癒された記事があります。17章では、「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」と言葉を与え、祭司の所に行く途中に癒されました。イエス様はいろいろな癒しの形をとられます。そこには、イエス様の深い思いがあるでしょう。10人を即座に癒しておられたら、そこで10人は、イエス様に感謝し、賛美したことでしょう。しかし、彼らは、祭司の所へ行く途中に癒されたのです。しかも、イエス様の命令は、「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」なので、他の9人には別に問題はないのかも知れない。しかし、救われたのは、イエス様のもとに引き返したサマリア人一人だけだったのです。

日曜日の礼拝の本質というのは、日常生活から神様のもとに立ち戻る、寄り道のような

ものです。やりたいこと、しなければならないことは多くある。しかし、このサマリア人が、何をおいてもイエス様を賛美することを、感謝することを優先したように、私たちは、この礼拝を通して、いろいろな問題を抱え、痛みを持つ私たちの生活を見つめなおす大切な時となるのです。そして、癒しを、清めをいただき、何をよも、イエス様の十字架と復活を通して与えられる、魂の救い、罪の赦し、永遠の命をいただいていることを確認し、あなたは救われた。もう大丈夫だ。心配しなくてよい、とイエス様のお言葉をしっかり握りしめて、私たちの行くべき所に、遣わされて行こうではありませんか。私たちは、ありがたき幸せ、この上ない喜びを与えられたのですから、この集もイエス様を賛美し、感謝する1週間を過ぎしたいと思うのです。

